

(1) 教材名： こんぎつね (2) の場面

(2) 本時の目標： こんと兵十の関係性に気づき、こんの後悔の気持ちを想像することができる。

奥間小学校初任者研修模範授業（主事招聘志願授業）。
奥間小学校初任者研修の指導教諭を担当するM先生、今週の金曜日に、初任者の国語の授業が校内研修で予定されていて、そのプレ授業として本日自分の教室を開いた。ついでに、名護市の教育研究所の研究者2名と、学びの共同体スーパーバイザーである、村瀬先生が同行されて、4年生の代表文学教材である「こんぎつね」での「学び合う学び」の授業への挑戦である。

各学校の各教室の状況は様々である。M先生も、今の自分のクラスの状況が万全でないことを十分認識しているが、いろんな状況での自分の授業と、子ども達の「学び」を見てほしいとのことである。

実にうれしい言葉である。誰もが「隠したがる」か「見せたくない」状況の中をあえて見ていただいて助言を頂きたいという。秋田喜代美先生の言葉に『教師とは、子どもの成長を幸せに感じ、そのことで自らも成長できる専門家のことである。』（「学びの心理学」より）…M先生の申し出に、ふっと思い出された言葉だった。山城先生の「自らも成長したい、成長しなければいけない。」教師として、一人の人間としての正直さや謙虚な心構えは、必ず子どもたちに届く日が来ることを私は信じて疑わない。



☆文中の児童生徒の名前は全て仮名である。

【授業開始前】 授業前に職員室で授業者と話した。本時の授業が不安であることが、教師の表情からありありとかがえたが、子ども達を前にすると教師の表情が変わった。



授業前、笑顔で子ども達と話している。「今日も、何名かの先生方が授業を見に来てくれますが、みんないつもの様に頑張ろうね。」…。教室は職員室の鏡。子どもは教師の鏡である。教師が不安や疑念を持って授業に臨むと大概教師の姿勢がそのまま子ども達に映し出される。授業者は、さすが大人である。授業前の不安げな表情が一切うかがえない。自己の不安と「子ども達をどうかしてあげたい。」一人間としての不安、教師としての自分の職責の遂行への葛藤を乗り越えようと必死である。見えない自己との戦いをひしひしと感じる。

【読む】 10:40 授業者：自分の声であわてないでゆっくり読んでね。 一斉音読→指名読み（3人）
みんな静かに自分のペースで読み入る。たどたどしい読みもあるが



抑揚、感情がすでにうかがえる子もいる。様々な読みから多様な「学び」が生まれる。時に教師は、一言一句明確な発声と音量を達成できた子どもの読みが素晴らしいと絶賛する時があるが、ここではちがう。自分なりにお話に読み入ることが大切にされる。様々な読みとは、聞こえる音声ではない。各々が文学にどのように親しんだか？である。

【書き込む】 10:50 授業者：気になるところ、友達と話してみたいことに線を引いたり、疑問や自分の考えを書き込んでください。各々思い思いに線を引き文章の行間に「書き



写真①

込む。写真①、両者の関係がとってもいい。「読み」の段階から、男の子は読めない漢字などを隣の女の子に訊いていた。さらに、女の子は、隣の男の子を常に気にかけていた。男の子が「表」と「赤」を読み違えると男の子にちゃんと読み方をしえていたのである。男の子もじつに「ほんのり」とした笑みを浮かべていた。両者の間の関係がじつに美しく見えた瞬間であった。写真は、書き込みのとき男の子が「こっちじゃない？」と訊いている時である。やり取りの詳細は聴けなかったが、距離をおいて観ていても安心できる「学び合い」の風景である。

教室に「安心」できる空気を作り出すのは仲間達である違和感のない「依存」を認める授業者の姿勢が鍵となる。

【書き込み】すぐに鉛筆が動き出す子もいるが、もう一度読み直して書き込みする子もいる。それでいい！



子ども達は各々書き込む、書き込みの段階でも「聴き合う」を促したい。「ここでいいか?」「これでいいか?」等、子どもなりの不安がある、互いに確かめることが安心につながり「学び合い」を促進させる。右写真、書き込みの様子をポートフォリオとしての評価材料として活用する。



【共有する】 10:57 授業者：そろそろいいかな?書き込んだこと聴かせてくれる。



授業者の「聴かせてくれる?」の発問にすぐ3人の子が勢いよく手を挙げた。手を挙げさせて、教師が指名するまでの「間」がちょっと気になった。テンポよくすすめてできるだけ多くの仲間の「読み」との出会いを促したい。その後も数名が勢いよく手を挙げる。しかし授業者は手の挙がらない子へも「つなげる」を心がけて授業を進めた。11:00 「ごんは 兵十のことを知っていたのだろうか?」子どもの発言からグループへの話し合いのテーマを下ろした。

【グループで話し合う】 11:06 小グループでの「学び合い」である。子ども達の顔がほころぶ。全体では一言も発言できなかった子、静かな子もみんな互いに「聴き合う」。



全体の共有の時は、少数の子ども達と教師によるやり取りであったが、子どもの発言を受けてテーマをグループにあずけたとたんに子ども達の表情が一変した。どのグループを見ても取り残されている子が見当たらない。授業開始から気になる子が数名いたが、小グループになると、みんなと同じように、対話の中にいる。間違いなく顔がほころんでいる。

なぜ、小グループ活動(話し合い)を授業の中に取り入れるか?まさに意図はこの風景である。静かでおとなしく、全体の前ではなかなか手を挙げて発表するにまで至らない子たちが、小グループの仲間同士なら、ぼくの声でも聴いてくれるからである。右の写真の男の子の表情をぜひ忘れないでほしい。どのような状況からこのような素敵な笑顔になれたか?である。



11:12 さらに「兵十はごんを知っていたのだろうか?」授業者は、ごんと兵十の関係に迫りたい。子どもたちはテキストの前時にもどりながら確かめていく。この段階で確認できたことは、「子ども同士にあずける。」ことの大切さである。

M先生ありがとうございました。先生のみじめさが先生自身の不安をかきたてているのかな?協議会でも話が出ていましたが、どこに学級経営の不安があるのだろうと思わせるほどの授業でした。確かに1つの授業を見ただけで参観者に届かないものやことはあると思いますが、研究所の2人も大変勉強になったようでした。素直に感謝です。ありがとうございました。初任研もあまり気負わずに楽しくやってください。

【村瀬先生より】

- 全体では活躍できなかった子も小グループで活かされていた。
- 教師が「分かってほしいこと」はグループでできていればいい。全体での共有の場における「できた」「分かった」に限定しない。
- 一部の子ども同士のやり取りに陥ったら、グループやテキストに戻す。
- ◎ ごんの片思いの素敵なエンディングを味わわせてほしい。

国頭学びの会ゆい